

ひたり、ひたり、と。どこかから追いかけてくる足音に、本当は気付いていたのだ。ただ、タイムリミットへの焦燥から逃げられるよう、恐怖に知らぬ振りが出来るよう、目を背けて耳を塞いで。

\*

さるすべり  
百日紅は悠を持つか

かつーん、と、軽い音がして。次いで、ぽちゃん、と。

軽石が池に転げ落ちるような音だと思った。

意識してしまったので振り向いてみると、波紋は既になく。小さな水面は、ただ静かに在るだけだった。不思議に思って覗き込んでみても、奥底までも何もない。

(空耳?)

気もそぞろなのはよろしくないなあ、と適当に思う。うーんっ、と思いきり伸びをしたら、頭がすっきりした気がした。実際なったかは別として。気がする、という勘違いは結構大事なものののだ。

ふにゃあ。押し殺せずに息を吐く。この頃の陽気は、妙に眠気を連れて来るので気持ちがいい。どこでも寝てしまいそうだ。

寝るのは大好きだ。もうずっと眠っていてもいいとさえ思う。

(君は寝すぎだと笑うけど。だってさ、気持ちいいんだもん)

(それに、ねえ、)

君にはこの世界でしかあえないんだ。

ざあ、と。温度の違う風が吹いた。

色があるとしたら、淡い紅の。温かい、でも不快ではない、空気。ざわつく、本来彼女が生きるに正しい季節の温度の。

「ご機嫌よう、陽だまりのおに一さん」

「こんにちは、みゆさん」

おどけた口調で、くすくすと。ああ、相変わらず、きれいなひと。

百日紅のお姉さんは、今日も、綺麗に咲いて綺麗に笑う。

「また寝ているの。いくら春になって気持ちいいからって、寝すぎよ。もっとお外に出て走り回って、楽しいことがあるでしょうに」

「眠くなっちゃうんだよ。仕方ないんだもん」

(眠れば、ここであなたにあえるからだよ。)

ふわり。ああ、しょうがないな、と笑うその顔が優しくて、とてもとても好き。

ある日突然、前日のことも思い出せなくなって何もかも分からなくなって、まっさらな記憶の中にぼつりといた。そこに、暮らしていた跡はあった為、自分の拠点だけはすぐに分かったけれども。

そんな、ふわふわとした感覚の中を何とか過ごし、少しずつ慣れてきた頃。

ある日から、眠ったらいつも、彼女がここに現れるようになった。百日紅に宿る、あたたかな人。

「時期違いただけど、咲いてしまったの」

困ったように笑って。それからずっと、夏のぬくもりと一緒に、ここで自分を迎えてくれる。

「ねこじゃらしがたくさん生えている庭の隅に行くとね、」

「池に、橋が架かっていると思うのだけれど。真ん中で水面を覗き込むとね、」  
「青い屋根から大きな木に登れるのだけれど、二番目の枝の下に小さな<sup>うろ</sup>洞があってね、」

彼女はいつも、起きた時の自分の為に、面白いことをたくさんたくさん話してくれる。

どうしてそんなに色々なことを知っているのか尋ねたら、「見てきたから」という答えだった。分からなくなる前の、自分を。

「普通より早く咲いてしまっ、ね。暇だったから、ずっと、見ていたのよ」

ちょっとだけ恥ずかしくなったけど、覚えていない頃の自分のことは自分では分からないし、何より彼女がとてとても嬉しそうに笑うから。

別に、自分のことを知りたいわけではなかったけれど、彼女の笑顔を見るために、ずっとこうして、彼女と僕の思い出話を聞いている。

かつーん、てん、てん、ぽちゃん。

ああ、また。

一度意識してしまうと、やはり耳についてしまうものなのだろうか。歌のワンフレーズがやけに頭から離れないのと同じ。耳鳴りとは違うけれど、気にしてしまっ、何だかめんどくさいなあ、とぼんやり。

とは言っても、意識しなければすぐに忘れるからいいのだけれど。

すぐに、意識は目の前の彼女に戻る。

今日も、ざわざわと気持ちいい空気。

\*

「今日はね、」

うん、と。遠くを見る目で、悩むように少し唸ってから、彼女はゆっくり切り出した。

「君が、私にしてくれたことを話そうかしら」

「……僕が、みゆさんに？」

うん。

小さく頷いて、どこか自信なさ気に。ゆっくりゆっくりと、話し始めた彼女を、じっと見上げた。

「私というか、正確には、私が咲く直前のことなのだけれども」

みゆさんは、百日紅の樹本体ではなく、今期の花なのだと言っていた。

「鞠の話をしたね。綺麗な、鞠を買った話。ころころ転がしたら、君はとても気に入ったみたいで。高い物なのに、そんなこと当然君はお構いなしなものだから、追い掛けては抱え込んで爪を立ててね」

……あれ。

何だか、違和感を覚えた気がした、けれど。

よくは分からなかったから、気にしなくていいやと思った。

続きを促すようにじっと見上げていると、彼女は、くすくすと可笑しそうに続ける。

「あまりにも、私より君が気に入ってしまったものだから。すぐにぼろぼろになるのはもう目に見えていたし、まあいいかって思って」

「でも。君もすごく夢中になっていたけど、多分私も、同じくらい夢中になっていたのね、」

周りを見てなかったの。何も、見えてなかった。

「君は、私を庇うように、前に飛び出してきてくれた」

ごめんね。

珠君。

ごめんね。

「まもろうとしてくれて、ありがとう。ありがとう。ごめんね。」

君が、本当に、愛しい。

「……？」

どうい話か、よく分からないまま、時間が終わってしまった。

薄らと、抱きしめてくれる彼女のぬくもりと、冷たい涙の感触を残しながら。

(よく分からない、けど、)

(そんな顔しないで、)

(泣かないで泣かないで、君はよく泣くけど、やっぱり笑顔が好きだよ)

(……あれ？)

\*

あの場所が夢だということには、初めて彼女とあった時から気付いている。ふわふわとした世界。でも、現実でも夢でも、どちらでいいと思った。現実じゃないのであれば、眠って、彼女にあいにいけばいいだけだ。

彼女は百日紅、自分は猫。身軽に動ける方が、動けばいい。

(そういえば、)

そういえば、

彼女が現実の方ではどこに咲いているのか、知らない。

\*

あの揺らぎがなかったかのように、今までと変わらない日々が続いた。

やわらかに笑う彼女、他愛もない話を転々。ただ穏やかに、その空気の中にまどろんでいた。

あの音は、既に、気にも留めなくなっていた。

\*

「もうすぐ、」

ふ、と。

思い出したように切り出した彼女の口調は、普段と何ら変わりなくて。

「もうすぐ、ばいばいなの。ごめんね、たくさんたくさん、ありがとう。」

「……？」

あまりにもさらりと、笑うから。それがどういう重みを伴った言葉なのか、耳に入っただけでは全く分からなかった。

困ったように、また、さらりと、彼女は笑う。初めて見る、それは、苦笑かもしれなかった。

「ばいばいなの。もうすぐ、私散るのよ」

「……え、」

自分は、どんな顔をしているのか。彼女は、あやすような口調でそっと、言葉を繋いでいく。

「いくら、百日紅だから長く咲くとは言っても。花ですもの。遅いだけで、終わりは来るのよ。永遠には咲けないわ、」

「……ごめんなさい、本当は、もっと早くに分かっていたのに、言い出せなかったの」

珠君。

「たくさん、ありがとう。記憶を奪ってごめんね。でも、君がまもろうとしてくれたから、今日まで私は生きていられた」

かつん、かつん。

ぽちゃん。

耳鳴りが。

もう、気のせいではなかった。水面が揺れる。紅い花が、ひらり、ではなく、ひとり、ひとり、と、重みに耐えかねたようにまあるく落ちていく。

啞然と、見つめた。落ちていく彼女の足元を。花として散っていく、彼女の足元を。

みゆちゃんみゆちゃん、みゆちゃん。

駆け出していた。夢の中の、言葉を喋っていた姿ではなく、現実の姿で。

ばしゃん。水面が広がっていく。いつの間にか渡れないほど広く深く。

遠くて、さっきまでここにいたのにもうあんなに遠くて。

みゆちゃん。

呼んだのに、今までのような綺麗な言葉にはならなかった。にゃあ、と、鳴く声にしかならなかった。

「珠くん、」

彼女が笑う。もう届かないところで、はらはらと、散りながら。大好きな笑顔。まもりたかった笑顔。あの瞬間、どれほど強く自分がニンゲンだったらと思ったことか。自分が、身を挺して出来たことなんて。

「たーまくん。」

ほら、泣かないで。

「……うん、君たちよりはやっぱり、少し長い寿命を生きられるものだけれど。でも、もう、夏までは生きられないみたいだから、最後に君にあいにきたの。」

その頃に咲く、私の好きな、君の好きな、あたたかな匂いの百日紅にしてもらって。  
……私と君のお誕生日。もう一度、一緒にお祝いしたかったね。

「ありがとう」

「ばいばい」

ほつり、ほつり、ぽちゃん。

彼女が散っていく姿を、ずっとずっと、見ていた。  
残された広い広い水面は、いつまでもいつまでも、凧ぐことはなかった。

\*

西日が淡い色を作っていた。

高い木の、洞の中。彼女が教えてくれた、自分がお気に入りの寝床にしていた場所。  
丸めていた身体を解す。鈍い感覚に、最後の時間が終わったのだと知った。ぼんやり  
と、狭い空を見つめて。

洞から出て、枝を勢い良く登った。高い場所へ。広く世界が見渡せる場所へ。  
春先のまだ冷たい風が、かさかさ揺れる。  
夏の気配など、まだどこにも訪れはしない。

広がるあお、だいたい、みどり、家々や木々、……何度も、何度も見渡した景色だ。  
何度も見て、諦めたつもりの景色だ。

ちゃんと気付いている。彼女は。

ただ、諦めたくなくて、泣きたくなかっただけだ。

にやー、

……もう、きみのなまえをただしく呼べることも、二度と。

百日紅は、今日も見えない。

\*

さいごのしあわせな夏。

3912字。

ありがち、ベタベタの詰め合わせ。